

萌芽的研究会報告

〔開催日時・会場〕

第1回 2016年2月8～9日（月・火） 会場：京都アーバンホテル
第2回 2016年2月23日（火） 会場：国文学研究資料館

(1) 参加者一覧（アイウエオ順）

相田満（総研大日文専）
安保博史（群馬県立女子大学）
オレグ・ブリアーニ（大東文化大学） 第2回
黄昱（総研大学生〔日文専〕） 第1回
七田麻美子（総研大学融合）
張培華（国文学研究資料館博士研究員〔総研大卒業生〕）
三田明弘（日本女子大学）
矢澤由紀（国文学研究資料館アルバイト職員）
屋代（高野）純子（国文学研究資料館専門員〔総研大終了生〕）

〔内容〕

【応用研究提案】教育コンテンツへの応用助言・成果発信方法についての助言（張培華〔総研大卒業生〕）・日本文学における研究動向（矢澤由紀）

【海外の観相学との協業提案】（西洋観相学・動物観相学研究者との調整：三田明弘〔日本女子大学〕）

(2) 議論の概要（発題者）

美男・美女・善人・悪人・尊卑・貴賤……。人間の容貌・体格・所作などからその人の性状・運命を判別する観相の営みには、有史以来の永い歴史と膨大な蓄積がある。本萌芽的研究会は、そうした観相学が期間にわたって受けつがれてきた事実を受け止めることによって、観相の学問体系と諸学との関係を整理するとともに、学問体系の蘊奥が集約された相書資料に着目することによって、当該学問の現代的再生と新たなイノベーションを創出することをめざすものである。

その目的の下に、すでに相田には先行する学融合研究や学振萌芽研究などの取り組みがある。そこでは、観相書の収集と読解、和漢における画論の検討、文学・史書などの検証を通じて、以下の成果を上げてきた。

- ①相書資源の構造化とデータベース化
- ②肖像絵画と観相とが不可分の関係にあることの立証
- ③文学を中心とする言説資料と観相との関係の指摘

また、上記の視点に加えて、

④日本・台湾・西安・福建などの国内外の専業占い師による観相の実地調査を行い、これらの諸点における研究の大成に向けてのロードマップを描ける段階にまでたどりついた。

しかしながら、観相学の裾野はとほうもなく広く、たとえば、文学の領域一つとっても、各ジャンル、各時代の専門研究者の視点からは、これまで観相の視点が全くといってよい

ほど視野に入ってこなかったため、既存の学問体系との関わりを洗い直す作業から必要で、予想される結果には、未開の沃野が待ち受けているといっても過言ではない。特に日本における観相のありようは、文学作品・キャラクターイメージ、文章表現などの視点で、古代から現代に至る壮大な年表を構築することが可能である。それほどに観相書・観相学との関わりで再構築される研究内容は、全ての面で新しいといっても過言ではない。

このこと視点を肖像図像に転じた場合も同様である。たとえば、画論と観相の親和性を前提に肖像をとらえ直すだけでも、膨大な関連事象を芋づる式に引き出すことが可能で、特に日本においてはこうした視点がこれまで十分になされてこなかったことは重要である。

その一連の取り組みの基盤資源として、前近代に表された相書を体系化するべく構築している観相トピックマップがある。本萌芽研究会では、そのデータベースを利用しつつ文学における観相との関わりを以下の視点で、報告をもとに協議した。

- ・研究の現状把握と発展の可能性 (①②)
- ・データベース観相トピックマップの現状紹介 (③)
- ・データベースに搭載される図像の統計学的応用研究の紹介 (⑤)
- ・文学作品と相書言説、相書との関連性の事例を報告 (④)

第1回の研究会は、会場を占い商店街との異称のある石切神社商店街への取材もかねて、石切から小一時間でアクセス可能な深草にある京都アーバンホテル会場で開催した。開催に先立って、有志参加ではあったが、全員の参加を得て、石切神社商店街での檀幸叡氏による観相を実際に体験してもらった。当該観相師は、100件以上ある商店街の中で、唯一「人相」をメニューの中に掲示している店である。

その後、アーバンホテル会場に場所を移し、1泊2日の合宿会議を開催した。また、第2回会議は、第1回会議の体験と会議内容を踏まえ、2週間後に開催した。以下は、それらの会議の内容のトピックと簡単なまとめである。

①日本文学研究における観相に関わる業績の確認 (矢澤)

日本文学研究論文目録データベースの調査により、日本文学研究におけるこれまでの研究蓄積は、『源氏物語』の高麗人の観相の場面をめぐる解釈が3分の1近くを占めていることが明確になった。この結果はかねてより予想はされていたことだったが、日本における観相学の浸透度と達成度、文化・社会的な影響史の面から見ると、先行研究の現状は、一面的な側面しか踏まえていないことは明らかで、特に日本文学と観相の影響史を真正面から扱う研究成果は、本プロジェクトに関わった者の業績以外には乏しい状況が改めて確認できた。

②西洋観相学研究者とのコラボレーションの提案 (三田)

フランス革命期に注目されはじめた動物観相学の研究者や、化粧による人相への効果が認識されていた西洋観相学についての研究者を擁している大学からの参加者と共同研究・シンポジウムなどの協業の可能性について協議を行った。その際、本研究会の参加者においても、それぞれの専門研究の観点から観相との関わりについての理解を深める必要があるとの認識を共有することができ、そのためには、本会のような小

規模の研究會を重ねることにより、負担の軽減をはかり、展示・小冊子などによる研究成果を蓄積した上で、共同研究會を開催、その後にシンポジウムを開催することをめざす認識で一致した。

シンポジウムを成り立たせるためには、日本における観相学についての知識の深まりも必要であるが、そのためには會合の数を重ねることで、認識・知識の共有をはかることが重要であるとのいう点で意見の一致を見た。

③観相トピックマップデータベースの紹介（屋代（高野）・相田）

観相トピックマップの概要の説明と使い方、および2015年3月に更新を行った観相トピックマップ6の新規項目を中心に説明を行った。観相トピックマップ6での仕様は以下の通り。

- ・搭載観相書は全部で9種類

古典相書のトピックカテゴリ

書名・部位・グループ・種類・表現・部位/種類一覧

- ・青空文庫に搭載される作品中から、観相に関わる場面を抽出し、その場面にGISデータを付与することにより、googleマップで場面が地図上に現れるようにした。

観相場面のトピックカテゴリ

作品（164作品）・著者・キーワード・場所・国

- ・屋代（高野）からは2016年2月23日に行われた総研大学術セミナー発表「「観相」における「文学」と「科学」」にさらに累加した内容の発表を行った。学融合的視点による発表では、島崎藤村や田山花袋も原書で読んだダーウィン「人および動物の表情について」を採り上げ、それが人相学に対する批判が原点にある書物であるともいえることを紹介した。

観相学を現代的に意義づけるに際しては、

文学ジャンルの横断・「近代自然科学への接近」・「地理的な横断」

の面で、

他者認知・コミュニケーション・異文化理解の問題にも通じる問題点をはらんでおり、今後の研究の方向性の一つに、ローンブロゾに代表される犯罪心理学の受容と否定の過程や動向を押さえる必要があるだろう。また、それが大衆化したきっかけとなった紙芝居作品原作による『黄金バット』ナゾー編でなぜナゾー博士が「ローンブロゾ」を口癖にしていたかなど、さまざまな視点による協議が行われた。いずれにしても、「観相」が何故、どのような経緯で近代に否定されることになったかを見定める必要があるとの結論に至った。

しかし、現代社会はさまざまな価値観にも変化が生じており、非科学的・迷信的なものについても、それらを研究する学問分野の受け皿が用意されている。そのため、「観相」を迷信と切り捨てるようなことにはならず、その意義を拾い上げる視点をはらむ論文や言説、社会運動も少なからず見られるようになっている。たとえば、

他者認知・コミュニケーション・異文化理解

の観点が紹介され、具体的な一例としてNPO法人「マイフィス・マイスタイル」が採り上げている「見た目問題」について、「観相」の視点からも向き合う必要がことを

示されたことを受けて協議を行った。

④日本文学における観相の受容（黄・安保）

日本古典文学作品に見える観相に関する言説の具体的事例の報告として、『徒然草』中の明雲座主の話（黄）と、『八犬伝』中の観相譚の紹介（安保）が行われた。

黄報告で行われた『徒然草』146段明雲の話は『源平盛衰記』34巻に同話が収められるが、『盛衰記』では時代が合わない信西が登場する点が異なる。中国の相書に観相名人として名が列挙される中に、たとえば東方朔や李陵など、意外に思える著名人の名が挙がる現象があるが、それに類する現象ともいえよう。この件については、今後、中国と日本の説話の例を阿ためて合理的な観相の系譜をたどる必要があることや、『源平盛衰記』の独自記事と『徒然草』との関係などの調査の必要性など、研究の発展次第では大きく発展する可能性のあるテーマが紹介された。

また、後者の安保報告による第88回の犬坂毛野の香具師の口上に見える活字本にして10頁を超える蘊蓄が披露される場面には、同時代に流布していた観相書『神相全編正義』からの得られたことを明示する証拠が歴然と現れており、文学研究上でも画期的指摘といえることが、報告を受けての協議の過程から判明した。

このことは、馬琴の知識の源泉を文化文政期を中心に幅広くたどることで、いままで注釈の方途が閉ざされていた『八犬伝』の解明に道を拓くことが実証できる一例として顕彰されるべきことだろう。また、協議の場で利用された観相トピックマップデータベースも発見の一助となっており、データベースのユースケースとしても知見をフィードバックすることで、より充実した研究資源が構築できる可能性が示されたことの意義は大きい。

⑤意味情報を内在的に持つ画像認識の有効利用の可能性（玉森報告〔相田代読〕・相田）

観相においては、顔面全体はもとより、眉・口・鼻・目など各部位の形状も判断基準となっており、古来より伝えられる観相書においては、吉凶判断、性行、生涯の運命などが、図と解説とともに伝えられてきた。そうした観相資料に描かれる図に伝承的規範性があるかについては、遅くとも元代ころより肖像画家は人相書の素養を身につけなくては成らないと言われてきていた。このことを実証するためには、さまざまに伝えられる観相資料に描かれた顔面や各部位の諸器官の図と相判断が同質の結果を持つ事が実証されなくてはならない。そこで、観相トピックマップデータベースで蓄積・公開されるデータを使用して、諸観相書に掲載される諸器官の図が相判断として共通の伝承を持っているかを検証してみた。具体的には目・眉などの顔面部位が描かれた画像パーツの吉凶を機械学習で教え込んでランダムな画像判定を行わせたところ、鼻の8割以上の正答率を筆頭に、いずれも7割以上の正答率を得ることができた。この正答率はデータ数の増加に比例してますます有効世性を発揮しており、今後はさらなるデータの追加とともに、その特性を利用した応用研究を考えるべき段階に来ていることが示唆されていることが分かった。

この内容は、3月11日に開催される情報処理学会大会で発表予定の報告であったが、このような特性を利用した応用事例について話し合い出た意見には以下のようなもの

があった。

- 1.人間に適用してセキュリティシステムに適用する。
- 2.お札など、シンボリックな存在となる肖像が、本当に予祝性を持つものか判断するための基準にする。
- 3.国文学研究資料館から公開されている歴史人物画像のような肖像画像の分析や意味性を持った画像検索に利用する。特に、吉凶の判断もメルクマールとすることにより、画像の意味を読みとる一要素とする。

⑥今後の研究の推進方法

文学研究領域において観相はこれまであまりにも等閑視されてきたことが、観相書との比較検討を行うことによって明らかになってきた。研究方法としては、まず観相書を検討対象資料として、その内容を構造化したデータベースを作成して、誰にでも客観的に使用できる状態にすること。また、膨大な知識体系を一度に網羅することには負荷が大きいため、まず、展示することを念頭に置いて、観相資料の知識世界を紹介する冊子を作成する目標を立てること。そのためには、たとえ未成熟な発表内容であっても、このような形でアイデアを共有して考えを熟成させる試みを複数回繰り返すことが大切で、より発展的な考えを生み出しやすいことが確認できた。

(3) 当センターが行う「グローバル共同研究」事業や「学融合共同研究」事業への申請への展望

本萌芽研究の取り組みを実施してみて、こうした会が、標榜される通りの、比較的自由で気楽な内容の討論を行うための枠組みとして最適なものであると実感しました。

本来ならば時間をかけて幅広い学科から多くの人々の参加を得て、従来の発想の枠を飛び越えたアイデアを寄せ集めという運営手法が望まれるものですが、時間的制約もあって十分な公募体制をとれなかったため、既存の研究の総括を軸に、それを糧にしてさらなる熟成をはかるためのロードマップの確認と、その成果を確実にステップアップさせるための研究会という位置づけでの開催となりました。

今回は総研大・日文専・外部参加者からの参加による研究会となりましたが、ほかに急病で出席できなかった複合科学研究科からの参加予定者からの研究報告を代読した報告も行い、参加者からの報告と協議でセンターで実施される学融合的要素をどこまで追究できるかについて、以下の点に申請への展望が開けることを確認しました。

1.国際的視野

中国・イタリア人参加者からは、今後も本研究テーマについて積極的に関わりたいとの意向が表明された。

2.教育的側面

上記(2)③で述べたような他者理解・認知的側面の歴史的表象として、観相学は重要な位置づけを持っていたことを説くことには重要な意義があると言える。

また、今回で以てこれまで観相に関わってきた在學生は総研大の籍を抜けることになるが、今後総研大生が参画することについても、本テーマには、発表の場、先進的研究論文業績を発信することに十分なテーマが多く提供できる状態にある。

3.学際的側面：統計学的応用研究の可能性

萌芽研究会で報告した内容を3/10の情報処理学会大会（会場：慶應義塾大学矢上校舎）にて、「サポートベクトルマシンを用いた自動人相判別の検討」（発表：○玉森聡，松井知子（統数研），相田満（国文学研究資料館））を行ったところ、6件の質疑応答を受けた。

主な質問内容は以下の通り。

①顔面全体の吉凶判断はできないか

回答：顔面部位の確度については、サンプル数がまだ少ない段階なので、今後数を増やして検討したい。ただし、部品の吉凶を組み合わせることによって、顔面全体の人相判別が可能ではないかと考える。また、この方法をさらに援用して、顔面の自動認識に繋がられないかとも考えている。

②セキュリティへの応用を何故2次元の絵で考えるのか

回答（相田・玉森）：実在人物の写真などを利用する場合、個人情報保護の点で差し障りがあること。また、観相資料のような2次元の絵を使用することについては、すでにモンタージュ写真よりも似顔絵の方が効果があることは、警視庁で運用されている捜査官などですでに実績があるので、方法的にも有効ではないかと考える。そこで、実在の人間をマンガ風にする機能を持つ2次元絵生成アプリを利用して、それを観相資料に援用することで、セキュリティシステムを作ることを考えている。

③歴史上の人物の絵を観相の視点で分析してみてもどうか

回答：基礎データは揃いつつあるので今後の課題としたい。

以上、次期申請に向けての準備は整いつつあり、今後は共同研究としてどれだけ人材と時間が割けるかという人的問題にかかる段階にあります。いずれにしても、今後2年間の内に成果を発信可能な状況にあるため、具体的なロードマップの策定と、学融合的な視点を盛り込んだ申請準備を進めたく思います。